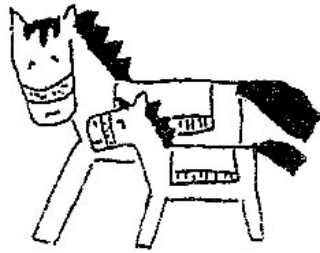


お馬のかあさん  
やさしいかあさん  
子馬をみながら  
ぽっくりぽっくり  
あるく

# おうまのおやこ

子育ても  
あせらず待ちましょ  
ポックリ、ポックリと



令和2年 9月 NO.310

〒760-0044 香川県高松市御坊町2-2  
高松第二保育園内地域子育て支援センター  
TEL:087-821-9347 FAX:087-851-0857  
<http://oumanooyako.sakura.ne.jp/>

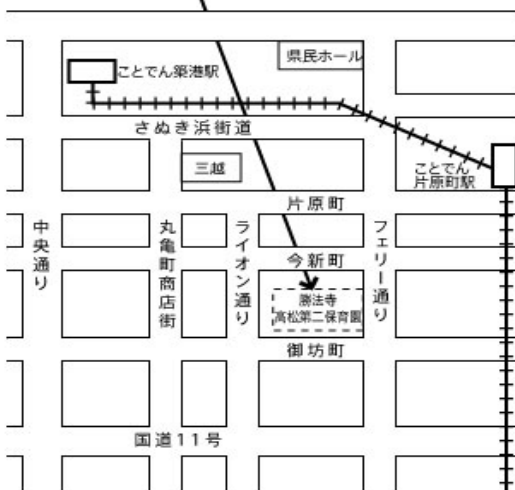
(厚生労働省・高松市委託事業)

～どなたでも～		9月の主な活動		～お気軽にどうぞ～	
9月	3日 17日	木	こうさぎおはなし会 15:30～16:30	小さいお子様もよろこぶ手あそび、 ふれあいあそびをしましょう。	
9月	5日 26日	土	体験保育 10:00～12:00	暑いので室内で運動あそびをします。	
9月	11日 25日	金	カラヴィンカ 19:00～20:30	肩甲骨をひろげて疲労回復の動きを したあと、なつかしい唄をうたいます。	
9月	12日	土	絵本と小物づくり 14:00～16:00	子育てに役立つパタパタマジックを つくります。花カゴが未完成の方は 仕上げますので、お持ち下さい。	
9月	24日	木	香川みすゞさんの会 14:00～16:00	セカンドハンドの活動内容や 異文化や国際理解について話して いただき、フリートークします。	

・火～土の9:00～18:00までは、園内開放して  
いますので、親子でご来園下さい。  
(但し、月・日曜・祭日は休み)

育児相談(月～土)9:00～18:00  
しつけや子育てについての悩み、保育園生活  
入園・見学についての相談もどうぞ。

香川県高松市御坊町2-2  
地域子育て支援センター



お髪お泥 出床お秋日い  
ばさちにのはの掃のがつか  
あえぶにまの除日たか忘  
まさい白みみれ、たかに、れて  
。 。

女ふ夜お  
王いとあ祭  
さまとそび  
。となくび  
したしたの

トランプの女王

金子みすゞ全集①  
「美しい町・上」より



# 「病院の中の学校」

愛知県立岡崎盲学校教諭 山本 純士

真新しいランドセルを背負い、飛び跳ねるように小児病棟を歩いていた聡美。その嬉しそうな姿は、いまでも鮮明に脳裏に焼きついています。

入院中の彼女のため、病棟内の遊戯室に家族や医師、看護師が集まって入学式が行われ、その後の授業は私が担当しました。

学校教育には、病気や事故で長期入院を余儀なくされる子どもたちを対象にした「病弱教育」という分野があります。私がかつて在籍していた愛知県立大府養護学校では、子どもの入院先へ出向いて個別に授業を行う「病院訪問教育」を担当していました。私たち教師はこの特殊な授業を「出前授業」と呼んでいました。

四月、五月と聡美は私の授業を元気にうけ、よく理解してくれました。退院に向かい、病状も順調に回復しているに違いないと私は思い込んでいました。

ところが六月に入ると、体調のすぐれない日が多くなりました。ある日病室を訪れると、聡美は背中を丸めてベッドの上に座り込んでいました。とても授業を受けられる状態ではないのに、どうしても受けると言ってきかないというのです。根負けして授業を始めましたが、すぐにぐったりと横になってしまいました。

病室を出た後、母親から涙ながらに打ち明けられた真実に、私は耳を疑いました。

「実はあの子、脳腫瘍なんです」



私に病名を伏せていたのは、同情されながら授業を受けさせたくなかったため、入学式の日にはすでに治療の手段がないと言われていたというのです。

聡美が旅立ったのは九月でした。彼女は私の出前授業を受けて本当によかったのだろうか。葬儀からひと月たった頃、私の疑問に母親は次のように答えてくださいました。

「授業を受けることは、あの子にとっては明日への希望でしたから、死が間近であっても、勉強ができて本当によかったと思っています。病室から院内の教室までの十五メートルほどの廊下が、あの子の通学路だったんです」

出前授業に携わる教師は、私が着任した年には三人しかおらず、そのわずか

な人数で愛知県全体を回っていました。行政のアピール不足で、この制度を知らずに子どもの勉強の遅れに悩む親はたくさんいました。そこで私たちはポスターをつくったり、この制度を利用した母親の手記を集めて冊子をつくったりして病院に配って回りました。予算がないためすべて自腹でしたが、その甲斐あって徐々に認知度は高まり、担当教員も最も多い時で十六人いたことがあります。

転勤で既に担当は外れましたが、私の教育観は出前授業の体験で培われたといえます。

宗一郎は小学五年生の冬に病院で骨肉腫の診断が下され、片脚を太腿の下から切断されました。大の野球好きで、所属していた野球チームでは、六年生になればレギュラーになれるはずでした。夢を絶たれた彼は、私が病室を訪れると毛布をかぶり、授業を拒否しました。

私は元々「俺についてこい」というタイプの熱血教師でした。当初は病院の子を見ると、「自分の力でなんとかしやらなければ」と強く思ったものです。

しかし、宗一郎のように失意の底にある子どもにとり、そういう教師と向き合い、「頑張れ」「君ならできる」といった励ましを受けることは大きな負担なのです。拒否され、最悪の場合、担当を外されることになります。

私は、彼が少しずつでもこの理不尽な出来事を受け入れられるようになるのを待ちました。言葉を交わすこともなく病室をあとにする日が続きました。

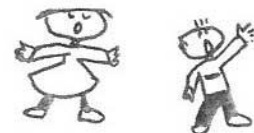
ひと月たった頃、彼の枕元にプロ野球選手のサインボールが並んでいました。友達が持ってきてくれたそうです。

「こりゃ読めないなあ。誰のサインボールなの？」

彼は呆れた顔で私に選手の名前を教えてくださいました。それまであえて避けていた野球の話題で初めて会話が盛り上がりました。

私はおもむろに、

「いまから鉛筆を転がして野球ゲームをしよう」



と提案しました。驚く彼をよそにルールを説明すると、彼はたちまちゲームに熱中し、久しぶりに大声で笑いました。

その日以来、彼は私の訪問を心待ちにするようになりました。そのうち鉛筆野球は、丸めたティッシュペーパーと新聞紙を使った室内野球に発展し、さらに彼は熱心に勉強にも打ち込むようになりました。

「僕ね、鉛筆野球と新聞紙の野球がいつとうおもしろかった」

そんな言葉を残し、宗一郎は松葉杖を上手に操って退院していきました。私が出前授業で子どもたちから学んだこと。それは、教師は子どもたちの「同行者」であるということです。

どれほど強く願っても、教師の力の及ばないことはたくさんあります。できることは子どもに寄り添い、支えることくらい。それは健康な子どもに対しても同じだと私は思うのです。

教師といっても、皆が飛び抜けて有能な人格者というわけではありません。むしろほとんどが平凡な人間であり、たまたま先に生まれたから、子どもたちの前に立っているにすぎません。

だからこそ、せめて共に過ごす時間はかけがえのないひと時にしたい。そんな思いで私は子どもたちと向き合ってきました。そうした中で、彼らが少しずつでも自ら前へ歩き始めた時、私は教師として、無上の喜びを味わうことができるのです。

「抜萃のつづり」その71より

## 「高松和貴こども園 4月から開園！」

園長 堀 侃子

ことしの4月、御坊町の高松保育園から林町、高松和貴こども園へと移行しました。御坊町で創立74年間の歴史はありますが、街中のせまい環境から駐車場もあり広い運動場、平屋の木造建築、自然にめぐまれ静かな雰囲気と、以前と全く違った環境の中、それを生かすべく、保育をめざして職員の奮闘が始まりました。

4月入園110人でしたが、8月には129人と毎月入園希望の方が増え、だんだんにぎやかになっています。

5月21日(木)には、延期していた花まつり(お釈迦様のお誕生をお祝いする日)6月には第1回保育参加、7月にはご近所の方も参加された七夕かざりづくり、8月にはお地蔵様をお迎えして色々趣向をこらした職員と甚平じんべいや浴衣ゆかたを着た子どもたちとの楽しい地蔵盆をしました。

コロナウイルス拡大の中、今まで続けてきた色々な行事を中止することなく、子どもたちが園での思い出として残るよう、職員たちみんなで相談しながら計画、実行してまいりますので、どうぞよろしくお願ひします。

